

文化高知 36

美の創造と保守と

吉村 泰輔

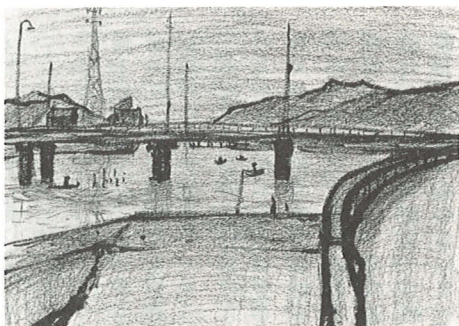
永い年月、土佐はポリネシヤであり続けて来た。川には鮎や鰻が溢れ、海は鰹や鯖に満ち、米は二度穫れ、果物や野菜にもこと欠かなかった。人々は美酒を汲み交す数多のチャンスに恵まれた桃源境であったから、殿様は殖産の必要を感じず、遂には酔った鯨と自らを讃えるに至った。

一方、雪に埋もれる加賀や能登では、無為徒食は許されなかった。そこで、輪島塗、九谷焼、加賀友禅に加賀料理が生れる。塗物、焼物は料理を洗練させ、着物は能や茶の湯と結び、茶は菓子を発達させる。

この南北の差は、尚現代まで持ち越され、文化、美、味覚の三意識のみならず、経済力に於ても量り難い落差が生じた。土佐には、美しい兼六園を作る欲も財力も生じなかつたのである。国民休暇県高知は、単なる保養、延命、隠棲の国造りではない。県民に豊かさを約束するものなのだ。

とすれば、こちらも考えよう。先ず古代塗、尾土焼、内原野焼。何れも小規模で知名度が低い。土佐和紙は、紙

の博物館がただひとり気を吐いただけ。削器を持たない核家族の増加は、鰹節の未来を暗くする。小夏や新高がどれ程浸透しているのであろう。唯一名高い皿鉢料理も、平然と冷凍物を満載する。たたきよ、お前もかノである。



「風景」古味秀友

昭和三十年代のままの駅前通りを保ち続けて、いっそ化石の街で名を馳せようか。容易に近づけなかつたからこそ美しく残された四万十川を、安易に売り立てて元も子も無くそうよりは、先に挙げた数々の産業を支える人々を

増やし、全国から世界に伸びる商品に仕立て上げる事こそ急務であろう。勿論他にも商品はあるのだが。

五月八日付高知新聞に森禮子さんが高知の県民性についてズバリ直言されていたので拝借したい。粘りが無く、すぐ諦める。昔、尾土焼を抛り出してしまった？ 自分の言いたい事だけ言う。だから議論が実らないし実行されない？ 先の事を余り考えない。従って後継者が育たない？ 酒に寛容。そんな堅い事言わんとマア飲めや！

他県は既にエクステリア、美術館に音楽祭の時代になっている。美しい物を生み出す人々を限りなく育てることが急がれる。

又、お城の復元、一の宮や国分寺を頂点とする古社寺の保護や整備、土蔵造りの民家や街並の保存等々、次代に引継ぐ美しい遺産も守り育てねばならない。

美の創造と保守に息長く取組もう。そこにこそ土佐の未来が開けるのであるまいか。

(高知パレスホテル社長)

高知への想い

木原正雄

一九八四年春から一九九〇年春までの六年間高知での生活は、残り少ない私の生涯のなかで、忘れることのできないものとなりました。京都のど真中で生れ、京友禅の中心であった中京に育った私にとって、六年間も京都を離れ、土佐の地に住むことになったのは、思いがけないことであり、初めてのことだったからであります。高知に行くことが決ってから、土佐は県外人には冷たいところだと聞かされてはいましたが、土佐の高知についての知識は全くありませんでした。京都人もよそ者には冷淡だとよくいわれます。このころよく引き合いに出されるのが「お茶漬け」の話です。帰りぎわに「まあお茶漬けでも食べていっとくれや」といって引き止められても、それを真に受けると軽蔑されるので気をつけなさいと。京都の人は、口先では愛想のよいことを言うが、心の

中はちがうのだということを言おうとしたのでしよう。誰が言い出したのか知りませんが、「お茶漬け」の話は京都に生まれた私には京都人を評するに的を射た話とは思いません。なぜこんな話を持ちだすかといいますが、土佐人は県外人に冷たいというのと同じように正しくないと思うからです。ただ、京都は昔から戦乱に巻き込まれることが多く、町衆はつねに自分を守らなければならず、おのずと用心深くなり、このことが他の人に冷たさを感じさせるのかもわかりません。

土佐人は郷土愛意識が非常に強烈です。こちらからは聞きもしないのに、「土佐はどうですか、魚は新しいし、良いところでしょう」と言われることにしばしば遭遇しました。土佐人の郷土愛は大いに学ばなければならぬ教訓の一つと思っています。しかし、強烈な郷土愛が郷土自慢と結びつくと、他の者を受け入れない厚い壁になることもあるのではないのでしょうか。

一週間程海外旅行に行き、その国の人と直接話すこともなく帰ってきた人が、一角の外国通振ることが多い昨今ですが、他国のことを正しく理解するためには、その国の言葉が話せ、その国の歴史、宗教などを勉強しなければならぬことはいまでもありません。外国のことはさておき、日本のことでも同じです。言葉は同じだからといって、勉強もせずに土佐を正しく理解することはできません。数年間高知に赴任し転勤される際高知についての印象などを書かれたものを見て、なるほどと思うものもあれば、そうでないものもあります。自分の不勉強をさしておいて批判がましいことを言うのはさしでがましいことですが、六年間位の高知在住では、高知を正しく理解す

ることはむづかしいということを知り、同時に土佐人の強烈な郷土愛からは学ばなければならないということを知ることができたことです。ただし、郷土自慢はご免蒙りたいと思っています。

これまで三年以上京都を離れたことのない私にとって、六年間在住した高知は第二の故郷ではありますが、やはり京都は、私の人間形成にとってかけがえのない土地であり故郷であります。任期終了とともに京都へ帰る決心をしたのは、土佐人の郷土愛から学んだ結果であるといえます。

京都へ帰って一番気になることは六年間に随分京都が変わったことです。良い方向ではなく、古いものがこわされ、特徴のない安っぽい街になりつつあることです。古いものが必ずしも良いとはいませんが、長年にわたってつくられ維持されてきた文化遺産がなくなれば、京都は京都でなくなってしまうでしょう。

高知はまだ自然が残っています。リゾートという名のもとに自然が破壊されるのをいかに防止するか。自然が破壊されれば高知は高知でなくなってしまうでしょう。京都の轍を踏むことのないよう祈っております。故郷を愛するがために。

(前高知女子大学長)

土佐郡鏡村

きこく塾

川村貞夫



神崎町いこいの村で

「ふるさと創生一億円」が華々しくデビューしてから、全国の自治体が行政のソフト化や個性化に向かったの歩みを速めている。文化行事が盛んになったり、地域の文化の掘り起こしも進んできている。また、道路や橋や施設の建設といったものも画一的なただ単に機能的なものではなく、時には遊び心や感性をもって、自然景観や人間生活により調和する形で造られはじめています。河川の改修工事によって、そこに住む水生生物が減らない方法が真剣に考えられ、魚類の生存に配慮が加えられたりして、少し工事費が高くなったとしても喜びやくつろぎを生む工法が採られるはじめています。

鏡村は、平成元年に村制施行百周年を迎え、百歳のお祝いをするにもこれからの新しい世紀に向かつてのむらづくりの誓いをたてた。村民憲章が新しく制定され、新しいむらづくりの基本理念がうたい上げられ、住民主体のむらづくりに再スタートを切った。

そして、従来、自己の教養を高めたり、趣味を豊かにしようと呼び掛けていた公民館活動の中に、むらづくりを真剣に考えていこうとする塾の開設が陽の目をみた。「参加人数は少なくとも、地域づくりやむらづくりについてお互いに話し合う場が欲しい」「行政とか、職員とか村民とかいった肩書や職種を抜きに学習していこう」との切実な願いから塾の開設をみたのである。

鏡村の公民館報は「きこく」と命名されている。通信社会教育紙として村民に親しまれてきている機関紙であるが、塾名も「きこく塾」とした。かんきつの台木に使われるきこくは、病虫害に強いし、きこくは帰国に通じ、ふるさとの繁栄を願う村民の心根にも通じる。

アドブレインの小谷展弘氏をゲストに「鏡村のアイデンティティ」を考えた第一回、西日本科学技術研究所の福留脩文氏を迎えて「近自然工法によるむらづくり」を学んだ第二



神戸市立農業公園を視察する塾生

回、入り込み対策に絞って研究を深めようと取り組んだ「神戸市立農業公園」と「神崎町のいこいの村づくり」の視察研修、そして若竹まちづくり研究所の畠中洋行氏を招いての「住み手と一緒に作った町づくり」の学習等々、一年たったばかりでまだまだ評価できる段階にはないが、参加者ひとりびとりのむらづくり創造への意欲が日一日と高まっていることは確かである。

過疎や高齢化の進む鏡村で、これから、二十歳以上四十五歳未満の中間者の話し合いが、ますます重要性をもってくるものと思われる。

「きこく塾」に学ぶ村の中堅層が、真剣に地域を見直し、地域課題について論じあうことから、新しいむらづくりは前進すると思う。

(鏡村中央公民館長)

いまも読んで読まれている本

浜田倭子

「とんでる学園シリーズ」「こまったさんのお料理教室」「かぎばあさんシリーズ」「ちびっこ吸血鬼シリーズ」と聞いて、すぐピンとくるものがある、その方は「こどもの本」の通。これらに「ズッコケ三人組シリーズ」と「はれぶたシリーズ」を加えれば、今、高知市民図書館こども室で中・高学年生に良く借りられている本の大半をあげたことになりません。この傾向は当館だけに限らず全国的にみられ、当館が二年前に行った全国同規模図書館一〇〇館へのアンケート調査でもほぼ同じ結果となっております。(表参照)

一層の読書離れが取り沙汰されている中・高学年でもこれらの本の動きだけを見れば、なかなかどうして、かなりの読書量になるのではとも思われますし、口コミで広がるスピードも早く、こども達の間で本の話が良く出ていることが窺われます。それではこのことを大人の方ではどう見ているのでしょうか。「高学年になれば、古典とか伝記とかを読んでもほしい」「もっと内容のある本を読まない」とそれらを読書と呼ぶ対象から外しているようにも見受けられます。でもそういつている大人は「こどもの本」の現状を御存知でしょうか。「こどもにも読ませたい」と古典全集の本とか有名な人の伝記を探しに見える方も多いのですが、その方達に完訳の古典本を手渡すと面食らった様子の時があります。多分自分が小さい頃読んだこども名作全集等のダイジェスト版を借りるつもりで来られたのでしょうか。「もっと読み易いのはありませんか」とよくいわれます。「創作童話にも良いものがありますよ」と薦めても「ちゃんとした本を読ませたいので」とやんわり断られることも少なくありません。又、現在それぞれの分野の一線で働かれています方々の地道な半生を描いた伝記等はこれは素晴らしい

いと思っている本でも手に取ってくれる方は少なく、親の本選びにももう一工夫欲しいところです。一方、こども自身の本選びにも問題がないとはいえません。どんどんファンシー化したシリーズが出版され、それにつらされるように女の子がそういう傾向の本ばかりを追い掛け始めているようです。全国調査の

上位に上がっている「一〇歳シリーズ」では、タイトル・挿絵から内容まで幼い恋愛にだけ焦点を合わせたような本づくりになっています。よく言われる漫画風挿絵も初期の頃のギャグ漫画風から女の子にターゲットを絞ったシリーズでは少女漫画風に変化しています。この年齢の男の子にはつぎの性的な差を打ち出した一連の少女ものには疑問を感じてしまいます。他に、人気が出てくる要因に「映画化」ということがあります。エンデ作の「モモ」は以前から評判の作品でしたが、一昨年映画化されてからはやはり良く読まれるようになりました。角野栄子作の「魔女の宅急



映画化されてさらに人気が...

便」も以前から面白いとよく貸出はありましたが、昨年夏のアニメ化直後は「映画とちよっと違うねえ」「本の方がしんみりする」「キキのイメージが違う」等とワイワイ感想が飛び交いながら引張りだこの状態でした。映画化されたものだけが良



こどもたちで賑わう市民図書館こども室

古典物の中で「赤毛のアン」「あしながおじさん」「ローラ・インガルス一家の物語」等は何度も映像化されたこともあって、変わらず人気があります。これらの本は、新訳で軽装版や文庫版もそろっているのが尚更です。こどもの自由な時間は一層少なくなっていると言われます。確かに去年までは、四月(新学期の始まり)に返本に来て「塾へ行くきもう本を借りに来れん、今までありがとう」と挨拶して帰って行く子がかなりの数いましたが、今年はその挨拶を一度も受けませんでした。それは良い方へ事態が向かっているということなのでしょうか。ともかく、少ない

時間の息抜きだから軽い本でよいというのでは淋しいですね。あまり取れない時間だからこそ量が少なくなって欲しいものです。中学年以上になるとなかなか大人の思うようには動いてくれません。大人の方でももっと「こどもの本」を知り、押しつけてない、面白さを共有できる友として本を紹介できるようにになれば、もっと状況は変わると思うのですが。そうした想いのグループが七月二十九日(日)に「第五回こどもの本を語る高知大会」を催します。ちよっとのぞいてみては如何でしょうか。(高知市民図書館こども室主幹)

- 男子によく読まれている本—
- | | |
|---------------------|---------------|
| ズッコケ三人組 シリーズ | 著 者 幹 正 四郎 |
| はれとどきふた シリーズ | 著 者 矢 野 龍 彦 |
| マーガーク少年探偵団 シリーズ | 著 者 矢 野 龍 彦 |
| 少年探偵 シリーズ | 著 者 矢 野 龍 彦 |
| 怪盗ルパン シリーズ | 著 者 矢 野 龍 彦 |
| ぼくは王さま シリーズ | 著 者 矢 野 龍 彦 |
| シャロック・ホームズ シリーズ | 著 者 矢 野 龍 彦 |
| 水木しげるのおぼけ学校 シリーズ | 著 者 水 木 し げ る |
| 日本のおぼけ話、わらし話 シリーズ | 著 者 水 木 し げ る |
| かぎばあさん シリーズ | 著 者 水 木 し げ る |
| 寺村輝夫のどんち話、むかし話 シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| ほっぺん先生 シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| 冒険者たち シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| こども版 西遊記 シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| ミステリーシリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| 大どろぼうホットエンプロツツ シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| ウルフ探偵 シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| タンタンの冒険 シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| ほうれんそうマン シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| ドリトル先生 シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |

- 女子によく読まれている本—
- | | |
|------------------|-------------|
| こまったさん シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| 10歳 シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| かぎばあさん シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| モモ シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| おまかせ探偵局 シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| 12歳 シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| クレヨン王国 シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| おちやめなふたご シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| はれとどきふた シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| 名たんていカメラちゃん シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| ズッコケ三人組 シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| 赤毛のアン シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| わがったさん シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| ちびっこ吸血鬼 シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| 月・火・水・木・金・土 シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| インガルス一家の物語 シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| ぼくは王さま シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| 小さなおぼけ シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |
| スプーンおぼえん シリーズ | 著 者 寺 村 輝 夫 |

上森 千秋 著 『流れと波の科学』 A 5判・240頁 定価1,500円 (財高知市文化振興事業団刊)

「博学多識の先生にはじめてまとまるものと感服しました。」 (菊田武男・三重大学名誉教授)

「多様な水の諸現象を巧みに整理、解説されており、面白く読んでいます。」 (椿東一郎・九州大学名誉教授)

「内容は物理学的に興味深く、分かり易く書かれておられます。」 (三井宏・徳島大学工学部教授)

「きわめて平易明快に書かれ、河川から海岸へのつながりを順序よく述べられ敬服しました。野中堰や南国海岸等の具体例は、読者を惹きつけることでしよう。」 (杉尾捨三郎・徳島大学名誉教授)

「土佐の文化と科学の臭いのする大変貴重な図書で、上森先生しか書き得ない本であると認識しました。」 (岩垣雄一・京都大学名誉教授)

3 文化の違い

中島 亨

イザヤ・ベンダサンが「日本人とユダヤ人」のなかで、日本人は安全と水は無料で手に入れることができると思っている、と書いていますが、むこうで生活してみてもはじめてそのことがある程度実感できました。

といってもドイツは治安が良いので危険を感じるようなことはなく、安全確保のためにとくに対策を講ずる必要があったわけではありませんが、鍵に対する考え方が我々日本人と大きく異なっているように思われました。ドイツの家の玄関のドアは全て自動ロックになっていますし、マンションなどの場合、共通の入り口のドアも自動ロックになっています。とても嚴重です。

さらに室内でもあらゆるところに鍵があり、バスやトイレは当然として、居間や物置からキッチン、戸棚にいたるまで備わっていました。やはり安全のためでしょうか。玄関の鍵を部屋の中に忘れて外へ出よう

ものなら一巻の終り、文字どおりアウトです。幸い一度もそういうことはありませんが、鍵にはいつも気をつかう毎日でした。

わが国の喫茶店やレストランでは、だまっけても水のサービスが常識になっていますが、ドイツではそのような習慣は全くなく、水が飲みたければ、いわゆるミネラルウォーターを注文しなければなりません。炭酸が入ったものが普通で、最初は飲むのに抵抗がありましたが、次第に慣れ、そのうち美味しくなるから不思議です。中華レストランで緑茶が欲しくなることもあります。もちろん有料です。

ドイツはなんといってもビールが国。水がわりといえどオーバーですが、ドイツ人はよくビールを飲みます。種類も多く、安い(五〇〇ml入りで中味だけなら六〇円前後)のでアルコール好きな私にはうれしい限りでした。ビールの銘柄は村の数く

らにあるといわれ、味はそれぞれ微妙に異なるのですが、わが国のものに比べ、全般にコクがあるように感じました。冷やすとコクがなくなるからと冷やさずに飲む通もいました。私など冷たさも飲んでみるところがあるので、そういう飲み方にはついぞ馴染めずじまいでした。グラスを斜めに注ぐのは、アワが立たないので美味しくなく、アワが立たないの味になるという事です。

さて、ここではちよつと書きにくいのですが、日な話を紹介しよう。ドイツの若者は、大学の食堂やキャンパスのベンチ等でところかまわず白昼堂々とキスします。はじめのうちは映画やテレビの世界が目の前で実演されるので、ハッとして立ち止まったものですが、慣れてくると何も感じなくなるとはいえぬまでも、見て見ぬふりをする事は出来るようになりました。個人主義が発達している国なので、他人の行為には干渉せず、といった傾向が強いのですが、これ程オープンになると世の中なんとなくつまらない感じがします。

どこかの国ではわき毛をトレードマークに売り出している女性がいますが、ドイツではそんなの全員です。話題にすらならず、男子学生

いましたが、どんなに簡単な作業でもその場でやってくれることはなく、予約して後日行かねばならぬ習慣になっています。そして、約束の日に行っても部品の注文を忘れていたり、部品を交換したため新たな問題が生じたことも数回あり、一度で用が済むようなことはありませんでした。

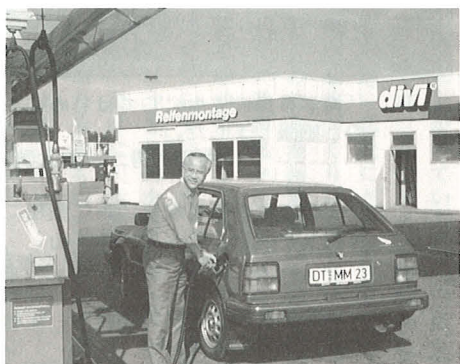
短期間の滞在でしたし、限られたわずかな経験から、軽々な感想は慎まねばなりません。電池の交換のとき時計をこわされたり、床屋さんで、指の間に髪の毛をはさんでバサッバサッ



ケルンのドームで

と切っておしまい、といった日本では考えられない技術に接しているうち、ひと握りのエリート能力はもの凄いくれど、案外、一般的なレベルはそれ程でもないのかも知れないと思うようになりました。

人は旅に出て自分の器の分だけ持ち帰る、と何かの本に書いてありましたが、ドイツを中心としたヨーロッパの芸術文化や歴史等についての知識や教養が豊富だったら、そして言葉が自由にあやつれたら多量のことを受取できたのに、と悔いが残ります。しかし、百聞は一見にしかず。起工から六〇〇年以上の歳月を経、都合三五〇年かけて完成したというケルンのドームでは、想像を絶する人間の知恵や労力や計画性に言葉では表現できない感動を覚えましたし、今では崩壊しましたが、ベルリンの壁で見た越境しようとし



給油はセルフサービスで

が女子学生の部屋に遊びに行っても、下着を干したまま互いに平気だそうですから、性に対する意識が我々日本人とは根本的に異なっているのでしょう。飲み友達になったドイツ人学生のピミー君が「女性の下着を見ても中に何があるかわかっているし、そのものではないから全く興味がない」といったことが印象に残っています。下着どころぼうなど考えられないと言っていました。

ところで、車のない生活は不便でしたので、諸々の不安はあったものの、思い切って日本製の中古車を購入しました。オンポロ車でしたが大したトラブルもなく快調に走っていました。二、三の部品に寿命が来たのは致し方ありませんが、新品と取り替えるべく何回か修理工場へ通

「酒と書籍」

毎年一度、高松国税局長を囲んで、マスコミの対話集が開かれる。その税務報告の中で、県別成人一人当たりの酒類消費状況に至り「香川86・9、愛媛84・4、徳島69・1、高知103」などと読まれたとき、いささか四周から、ある種の感嘆とも嘲笑ともとれるザワメキが起るのである。『さすが土佐だ』と言われ、うれいような哀しいような「ウンカナシイ気持」になってしまつ。酒を飲むことは、悪いこととは言わな

い。しかし酔後に、文化的な創造が行われるか。音楽や美術や学問的研究が、酒の後から生ずるものではない。酒は一日の末端に位置しなければならないはずである。高知のサラリーマンが、仕事が終

えるとき酒場へ走るだけなら、文化の高場につながるはずはない。

一方、高知の書店の発達はどうであろう。先日もある医師や薬剤師から「高知の書店には良い専門書がないから、高松へ買いに来た」という話を聞いた。高松には有名な書店が、しっかりしたコーナーを設け、消費者に役立っている。売れな

高知文化寸考

谷 是

香川県高知県人会事務局

いから置かないのか、置かないから売れないのか、土佐を愛する人間として、笑いごとではない。

近年、土佐から人物が出ないと言われ、競争／＼でペーパーテストを繰り返して卒業したエリート校出身の人々も、社会へ出ても、何かまた競争のくり返しで、時には他を蹴落としてまで自

て撃たれて亡くなった逃亡者の墓や東ベルリンの物資の乏しいデパートやスーパーの暗い光景などは、強烈な想い出としていつまでも私の心に残ることでしよう。

そして、ベルリン・フィルをはじめ、本場の各種コンサートを聴くことによつて、音楽とは何か、音楽はいかに表現すべきか、といった根本的な問題を解くいくつかのヒントが得られたことは、私にとって何よりの収穫でした。

(高知大学教育学部教授)
(注)グライダーゼーエンは「また、お会いしましょう」という日常語。

分がよくならうとする、浅薄な人間もいないではない。そんな人間ばかりでは、足を引つ張りあい、傷つけあい、共に伸びはしない。喧嘩犬を狭い囲いの中に入れたようなものである。せつかくの豊かな才能や天分も、そんな環境の中では育たない。何でも「俺が、俺が」と言わずに、他を尊重し、有能なものを誉め合い、敬仰し合う、美しい土壌がなければ、土佐の文化も育つまい。仕事の後、少し酒もひかえて、より知的、芸術的、創造的なものに時間と金を充てることができな



地方出版—10年

国則三雄志

早いもので、小社は来年二月をもつて、一〇年を迎える。設立当初、「三年間は持ちこたえてみせる」と密かに決意したが、必敗の勝負に挑む弱小選手の身ぶるいと高揚感を、昨日のように思い出す。

以後、出入業者や銀行の、間断なくもたらしてくれる雨、風、日照りの作用に、皮膚は色褪せつつも鍛えられ、骨は軋みつつしなやかさを増し、いつの間にか三年、五年と通過して今、何事かを主張しつつ小社は確かに存在しており、それは私にとつて、奇跡に近い。

ビジネス上のトラブル、制作進行状態の懸念等々で、私の不眠を強いて当然のように、今日、明日、未来へと頑強に在り続けようとする小社に、出来の悪い息子のようにてこずりつづけて来たおもいが今、先立つ。

既刊出版物四〇〇点(内、企画出版四七点)近くが、猛烈な勢いで流れ出たが、待ち受ける不特定多数の掌へ、あれらは一体いかなる表情で吸い込まれて行ったのか。個々の発信(出版)が、然るべき受信者の電波にうまく合致したか。そしてそこから誕生した新たな発信が、幻の受信者目指して今、どこをどのようように駆けめぐっているのか……と想像する時のみ、私は鼓舞され、まことに楽しい。

ところが、今、元もとの発信基地たる小社の、経済的現場の、何たる惨状。

安保闘争以来、硬派の出版物は売れず、あの岩波文庫でさえ、キラキラ装丁で人の目を魅くとうとするていたらく。かつて全国販売を展開するべく、東販、日販の窓口へ行った際、「今は、マスセールの時代ですよ」と青二才に言われ、執拗に粘る私に彼、私の視線をこれ見よがしに誘導しながら指さした、その先端がマンガの山。

何たることか。と慄然。どうやら活字文化の道行きは、人の心の道行きと逆行するらしく、衰退への道のみ、キラビヤカで、太く、まっ直い、と思ひ知らされたのであった。で、あるから、メイン道路から遠く離れた露地裏のごとき地方出版なんぞ、生業として成り立たない。

私の敬愛する恩師でさえ、「彼はいつか自爆するだろう」と、その出版の際に書き記してくれたし、私はまたその言葉を、妙に心強いものとして受けとめた記憶がある(それが大方の見方でもあったらしい)。案の定、私は確かに、家一軒売り飛ばすハメに陥ったし、今また他人の家を売りかねない目つきで、街をさまようこともあるのである。だが、何らかのかたちで小社に関

わり合った人たちは事のついでにとばかり、借入金金の保証人にホイホイと応じてくれ、もぎとるように借りた金にも一切、返済要求はせず、また企画出版の適切なアドバイス等で熱い視線は冷えることなく、殺さずに生かしよけの熱い精神は私にとつて、親よりも尊い。

遊泳禁止の川で喜々として泳ぐ駄駄っ子の少年の哀れな最後の時期をあれこれと詮索しつつ、悲しく、温かく見守ってくれての一〇年であった。

つらつら考えてみるに、小社の存続を、世間的レベルで縦横十字火思考すれば、絶望しなければかなりの阿呆と判定されかねないのに、この自爆への細い細い一筋の道がなぜ、いつも明るいものとして、私を呼ぶのか。なぜ私は、一冊の本が出るたびに、飲めもしない酒を乾盃したがるのか。

それはきつと、私自身が投げ、失ったものより、返ってきたものが途方もなく大きなものであったのである。それが何であるのか説明は難しいが、人の生を生き継ぐためのその継ぎ目をいち早く照らすおおきなランプのごときもの、としか言いようがない。

(株)土佐出版社代表取締役

昭和八年、浦戸湾東岸を走る土佐バス株式会社路線が開通し、停留所「自由の松原」が設置された。この名称は、松原の中にあつた豪商川崎の別荘で、板垣退助と谷干城が自由民権の是非をめぐって大議論をしたことを記念したものであるが、その確かな年月は明らかでなかった。

昭和三年七月三日付『高知新聞』記事は、明治六年盛夏時、農商務大臣を辞して帰郷した谷干城將軍はこの別荘にいた板垣伯に面会を申し込んだ、伯が快諾を与えたのである日將軍は片岡健吉を伴い屋形船で別荘へ乗りつけた。お伴は当時下ノ新地で梅花楼を経営していた山崎松女と川崎家番頭山岡吾八(当時二歳)二人であった。別荘には伯の用心棒野村牛造がいてすぐ通された。会談は至極無事に運んでいたのだが「遽かに険悪な空気となり、伯と將軍の正面衝突で料理どころか、食事も抜きにして大激論を戦はし、机を叩いて怒鳴りつける声は山にこだまする有様で、制止役の片岡氏もほと／＼困りきったといふ」と伝えている。

しかし、谷干城が農商務大臣に就任したのは明治六年三月三日で、辞任したのは明治三年七月三日だから、会談を明治六年盛夏とするこの記事は誤りである。

『高知新聞』が大日本帝国憲法発

布五〇年を記念して、昭和三年三月に連載したかつての民権家の座談会「五十年前を語る」の中で、片岡啓太郎(片岡健吉の長男)が「土佐バスのにり東孕を種崎に向ふ途中『自由の松原』といふ所があります、そして車掌は板垣先生の別荘があつた所で明治三年頃板垣先生と谷將軍とが大変激論した所であると説明して居ますがどうもこれは間違ひではないでせうか、ねえ櫃谷さん」と質問

生き続ける自由民権①

「自由の松原」

外崎光広

し、櫃谷竜吉は「板垣先生の別荘ではなく川崎の別荘であります、この別荘は八畳の表座敷が一間と六畳が四間、四畳半が二間に広い勝手場があり手頃の別荘でありましたが、板垣先生はこの別荘が大変お好きで新田(浦戸湾西岸)から船に乗り度々ここへ参りました、明治三年頃と思

ひますが板垣先生と谷將軍と片岡先生の三偉人が秘かに此処で会合しましたが板垣先生と谷將軍とが意見の

大衝突をなしどうなる事かとお付きの人々をハラ／＼させたそうであります、その日のお付きは野村牛造、下ノ新地梅花楼の女將政鶴事山崎松山岡吾八(川崎手代)、渋谷周(別荘番)などでありました、私はこの会合があつた直後、お付の一同からその話を聞いた事があります、これによつても激論のあつた事は事実でせう」と答えている。

これらの新聞記事を手がかりに調

査したところ、明治三年に板垣・谷・片岡がそろつて高知に居住した期間は次のとおりである。

- 八月六日 板垣退爵の上、高知帰着
- 九月三日 農商務大臣辞任の谷干城 高知帰着
- 二月九日 片岡健吉、三大事件運動のため高知出発

従つて三者の会談は九月三日から二月六日までの間に違いない。

板垣と谷が、犬猿の仲だったこと

は有名で、片岡が二人の間の取り持ち役だったとの言い伝えがある。そのことは土佐藩出身で参議・元老院議員・枢密顧問官など、明治政府の高官を歴任した侯爵佐々木高行の日記にも登場している。佐々木は明治八年三月五日、大久保利通との面談で、「陸奥(宗光)ノ軽薄、河野(敏謙)狡猾、後藤(象二郎)ノ醜態、板垣の狂気等ヲ、一々其次第ヲ申述べテ、互ニ大笑ヒタリ」(『保古飛呂比』六卷三三八頁)といい、明治九年三月三日には「谷干城モ同志ナレドモ、一体ニ不平家ナレバ、政府ニ対シテハ十分ニ熟議モ出来兼候補合アリ、然レドモ、板垣トハ始終反対ナレバ、此点ハ都合宜シ」(七卷九一頁)と書いている。

橋詰延寿著『高知市史跡めぐり』は、両者は「三日三晩の大論戦を続けたところと伝えられている」と書いているし、小島徳治著『南国夜話』は「卓をたたき皿も燭筒も飛散るといふ大口論となつた」と書いているが、当時谷は再発した胃病の療養にとめていた(二月六日付『土陽新聞』)から、これらは後につけ加えられた尾ひれだろう。

「自由の松原」は今もなお土電バス停留所として、市民に親しまれている。

(松山商科大学教授)

四万十川の渡舟

坂本正夫

近代以前の河川には一般的には橋はなく、川を渡るには歩渡り、舟渡し、籠渡し、網渡しなどの方法がとられていました。

明治維新以後は今までの渡しは漸次架橋されましたが、四万十川には昭和三十年代まで多くの渡舟があり兩岸を結ぶ交通手段として重要な役割を果たしていました。

四万十川の渡場（渡舟）には往還渡し、地下渡し、私渡しの別がありました。前二者は造舟費や渡守給などを地区民全体で負担し、私渡しは関係者が負担していました。

渡しの方法には渡舟、橋、徒渡りの三つの方法がありました。

渡舟は下流では年中利用しましたが、中・上流では春から秋にかけての水量の多い時季には竹竿、櫓を用い、水量の少ない冬季には兩岸にワイヤーを張り渡して曳き舟形式にすることもありました。

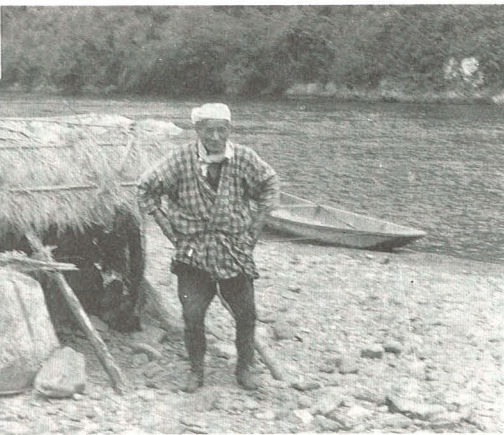
橋には舟橋、竹橋、筏橋、一本橋（飛び石伝い）などがありました。川幅が広く水量の多い中・下流では舟橋、竹橋、筏橋などが利用されていました。

最上流では丸木橋、石橋、徒渡りなども見られました。

渡場には渡守（渡番）小屋がありますが、往還渡しと地下渡しでは地区民の労力奉仕で小屋を造っています。

した。「あの岩の頭が見えんようになったら、渡舟を止めにかいかん」という増水の判断の目印になる水盛石、計り石、計り場などと呼ばれる岩や川岸もありました。

渡守には村へ入り来る旅の職人を雇い入れたところや、地元土地を持たぬ者とか、お年寄りなどに請け負わせたところもありましたが、これは長続きせず村人が毎日交代で回り渡りにしていたところが多かったようです。地区外の者からは渡し賃を取っていましたが、平水（平常の水量）と出水という水量の違いで渡し



賃に差をつけるのが普通でした。渡守は乗舟者がいないときには草履、わらじ、籠などを作ったり、いろいろな内職をしたりしていました。また渡守小屋は、村人が知人に渡す荷物の中継所になることもありました。なお、渡舟には七人で乗り込むものではないといわれていましたが、これは七人ミサキと関係する俗信です。

（高知県立小津高校教諭）

本川神楽

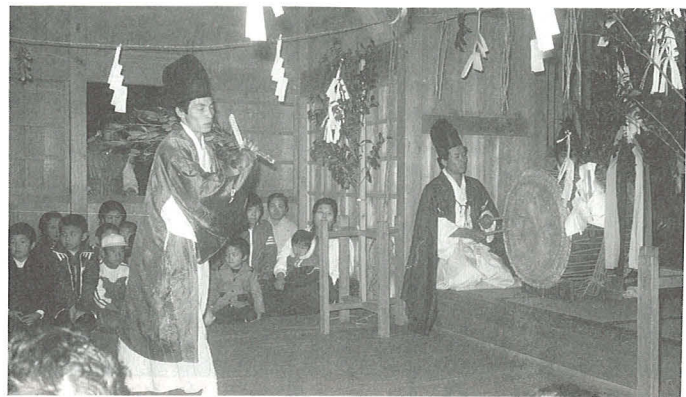
—夜神楽の神秘—

高木哲夫

四国山地の東から西へと神楽の里が続く。このうち香美郡物部村いなぎ流御祈禱神楽、長岡郡大豊町岩原・永測神楽、土佐郡本川村本川神楽、吾川郡池川町池川・安居神楽、名野川神楽、高岡郡東津野村と梶原町との津野山神楽の七つの神楽が、昭和五年「土佐の神楽」として重要無形民俗文化財に指定された。

これらの神楽の演目、所作、服装、神楽歌それぞれに異なっている。しかし、共通した部分が多い。ことごとく考えると、その源は同じであったとみることができる。それが四国山地の長い長い暮らしの中で異なった趣をみせるようになったのであろう。

本川神楽は四国の霊山石槌山麓の村に伝えられているものである。そこは吉野川の湧き出づるところでもあり、水は清く静かに流れていく。この豊かな森林と流れの中での山里びとの営みが、いつどのようにして



始まったのかは知り得ないが、暮らしの祈りと喜びとを秘めているのが本川神楽である。

わたしが本川神楽をこよなく愛するのは、土佐神楽唯一の夜神楽であるからである。国境の村里が紅葉に染まるのは早い。その紅葉が散ってしまふと寒気は一気に襲ってきて、粉雪が白く舞い始める。冬の夜も暮れ果てて、雪の夜の静寂は深まってゆく。そして突如としてあの力強い神楽が闇夜の中に響きわたる。

白装束に烏帽子姿の舞人が指間に一枚の神葉を挟んで舞い始める。神葉を挟みこんだ手先は、鋭くそりかえり、神葉もまた鋭く黒光って虚空を突きさす。聖なる神楽の舞台に入り来る邪心あるものには、これが剣となつて突きささるのである。たった一枚の神葉の舞は夜の神秘である。

こうして舞台を蔽い清めると、雪の精霊が白い装束をまとって舞い降りる。仮面の神々が舞い出してくる。仮面は神の仮りの姿である。神の役目は山里の悪魔悪鬼なるものを追い払うだけでなく、征し鎮める



ことにある。だから太刀を抜き激しく舞い続けるのである。

振舞酒にうかれ出た里人が、徳利を片手にさげて舞い始める。どっと笑いが渦巻く。渦巻かれたわたしは、瘤取り爺さんの踊りをほめそやしている赤鬼青鬼たちの、あの幻想の世界へと浸ってゆく。外は暗闇である。夜神楽ならではの幻想である。それがわたしを魅了させてやまぬのである。

（高知県立高知工業高校教諭）

佐野順一郎というのがフルネームだったが、ぼくたちはいつも「佐野順」「佐野順」と言っていた。姓と名をこんなふうにつづめていう言い方には、愛称の場合と見くびっている場合があるようだ。さて「佐野順」はどっちだったのだろうか。たぶん両方だったように思う。

ぼくとは遠い親戚すじだったし、つねづね憎めない男だと思っていたので、ぼくが「おい、佐野順よ」などと言うときは、もっぱら愛称のもりだった。しかし、彼にはややもすると人を鼻であしらうようなシニカルな一面があったので、そうとはかりはいかなかった。仲間うちにも頭から毛嫌いして「おい、佐野順」とにくにくしげに呼び捨てにしたものもいなかったわけではない。

寒くなると、佐野順はいつもす汚れた着たを着て事務所へやってきました。ぼくが借りた松湖の借家の二階が、日本プロレタリア作家同盟高知支部という、特高などにいわすとあんまりホックリしない団体の事務所所になっていた。とんとんと二階へ上がると、彼は粗末な机の前にいきなりあぐらをかく。ひざのあたりで小刻みに貧乏ゆすりしながら、火鉢の灰の中から吸い殻を拾い出してはキセルにつめて、まず一服一それからおもむろにペンを取り上げて原稿

紙にむかう。これがそのころの彼の日課だった。

こうして佐野順は何日かかけて六十枚ばかりの処女作「縊死」を書き上げた。軍部がいわゆる満州事変をでっちあげて、中国侵略の第一歩を踏み出した一九三一年の冬のことである。「縊死」は当然ながら反戦小説だった。佐野順は香美郡富家村(現

忘れられた作家

信清悠久



じころ、仲間の一人で詩人の植村浩はふところからザラ紙のノートをひっぱり出しては、随時随所でチビた鉛筆をなめなめ下手な字で傑作「間島パルチザンの歌」を書いていった。二人はたがいに才能を認め合った仲間だった。

作家同盟中央機関誌「プロレタリア文学」一九三二年四月臨時増刊号

に、反戦小説「縊死」と反戦詩「間島パルチザンの歌」が同時に掲載された。植村は中央の同志たちの間で大きな話題を呼んだが、佐野順一郎はそれほどの注目は集めなかった。それでも佐野順はへこたれなかった。二年後に作家同盟が弾圧によって解散した後も、新雑誌「文学案内」に「港の漁民」「芽生」を、つづい

て改造社の雑誌「文芸」に「敗北者の群」「季節の風」「羊」「入所の日」などをたてつづけに発表して、日がたつにつれて、知る人ぞ知る作家に成長していった。

転向作家が続出し、時局に迎合した戦争文学が横行するなかで、佐野順が書きついでこれらの高知を素材にした一連の小説はどの一つをとっても、プロレタリア文学の初心を忘れない思想性豊かな作品だった。

でも佐野順はしよせん忘れられた作家として一九六〇年八月十九日、取材先の宿毛市で急逝した。五十一歳だった。その日からかぞえてもちようど三十年、このまま埋もれてしまふかと残念に思っていたおろしも、今年の五月、生まれ故郷の土佐出版社から「佐野順一郎小説集」が初めて日の目を見た。それには、「港の漁民」「芽生」「敗北者の群」「季節の風」「羊」の五編がおさめられており、詩人の猪野睦君が一つ一つの作品について簡明に核心をついた解説を書いている。

こんなうれしいことはない。地下の佐野順も貧乏ゆすりしながらシニカルな笑みをうかべ、そのじつ内心では大きなよろこびをかみしめていることだろう。

(エッセイスト)

高知を撮る

鏡川のはぜ釣り

国光 敬一



— 第5回高知の映像コンテスト入選作品 —

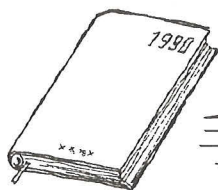
年末でもないのに「手帳」がよく売れているという。数百年で買える昔からある旧タイプのものではない。五、六千円から一、二万円もする「手帳」が、である。

従来のダイアリーに住所録とメモ用紙のついた手帳に代わって、リフィル式のシステム手帳が爆発的に売れだしたのはつい数年前のこと。確か一、二、三万円もする英国製のファイロファックが紹介されてからのことである。

「記憶にたよらず記録にたよれ」——忘れてもよいように、いや、忘れるために情報を記録する道具として、手帳は使われてきた。単なる書きつけ、メモ帳の段階から昭和三十年代半ばごろ、時間管理、情報管理を重視した「能率手帳」が登場し、四十二年に開発された「システムダイアリー」によってリフィルの多様化、重要度による色分類等、その機能は大きく拡大された。そして今、「システム手帳」「電子手帳」の時代を迎えた。

三十代の男性に人気のあるのは本体

現代風俗を考える〈8〉



手帳

一、二万円もする聖書サイズのもの。特に、カード電卓からカッター、糊、クリップ、メジャー等、点文具セットの収納できるM社製のものがよく出ているという。若い女性に買われるのは五、六千円の薄手で小型のカラフルなもの。中には赤・青と表紙の色を替えて一人で複数買っていく人もあるとか。

こうなるともう明らかにファッション感覚。

一方、二十代の新入社員層に人気のあるのが電子手帳。それも時計機能、電卓機能、電話帳、スケジュール機能に加えて、ICカードを取り替えるだけでゲームもできる多機能物程よく売れるという。

現代はいわずと知れた超情報化社会。ワープロ、パソコンと事務のOA化が進み、仕事をとり巻く環境は大変貌。反面、人間関係は益々複雑となり、人・モノ・時間活用のツールとしての手帳のもつ役割、その周辺も様変わりしつつある。

さて、これだけモノが氾濫する中で、あなたは「手帳」を十分活用しているだろうか。それとも「手帳」にふりまわされてはいないだろうか。

今を生きる高知の女性誌

土田 京子

女性誌「雲母きらら」

「昭和」という、ひとつの時代が終った一九八九年を「新生」の時とみて「今を生きる高知の女性誌を創ろう」と二十人余りの女性が集まり創刊号を出版しました。



形式にこだわらず、自分の精神と体でとらえた経験を書き置こう、ただ一つの約束とは「平和でありつづけることを大切にしていこう」としました。年二回（五月・十月）に出版し、この五月三号を出版したばかりです。エッセイ、詩、俳句、小説とある女性の作品の中に「招待席」と名づけて男性登場のページも設けています。皐月のあした 碧空に放つのはきらら の鼓動です。いのちを生み 守り育てる女たちが

高知大学交響楽団

発足二十八年目を迎えて

石川 真一

昭和三十七年に発足した「高知大学交響楽団」も、今年で早くも二十八年目を迎えることとなりました。当時は有志数名だった団員も、今年は二十数名の新入団員を加えてほぼ五十名となりました。昔に比べるとかなり大規模になりました。活動は、毎週三日の練習に加え、春夏の合宿、団内発表会、小学校でのミニ・コンサート、中・四国連合音楽会への参加、そして定期演奏会とさまざまです。さらに今年は、小学校のコンサートが一枚増え、秋に愛媛で行われる国民文化祭への参加、と活動を広げる予定です。春に行われる定期演奏会は、私たちにとって最大のイベントです。一年間これを目指して頑張っているといっても過言ではないでしょう。昨年、ちょうど第三十回目だったので、その記念に「シューベルトの夕べ」と題し、シューベルトばかりを選びました。今年は五月二十六日に演奏会を終えたばかりなので、来年の演奏会に向けて練習を始めています。新入団員も、ほとんどが初心者にもかかわらず自分なりに精一杯頑張っています。そんな



PMクラブ

子育てネットワーク

島中 智子



パワフル・ママの頭文字をとって「PMクラブ」、子育てを通じている人々と出会い、さまざまなことを知ろうというグループです。転勤族、核家族で子育てについて相談する身近な人がいない母親たちが集まってワイワイガヤガヤおしゃべりし、情報交換する現代版の井戸端会議といったところ。このクラブはマタニティスイミングに通っていた仲間十数人が、出産後集まって六十二年二月に発足、現在会員は全国に広がりが約百二十人余の在所帯となりました。高知市と北九州市で毎月一回、子連れで集まれる例会「PMセミナー」の開催の他、毎月発行する会報はすでに三十八号になり、家族ぐるみで楽しめるクリスマスパーティーや花見も毎年行っています。自分の子だけを見ていると育児書と首っ引きになり、まだおむつが外れない、歩かないなど不安になります。他の子の成長も一緒に見ているので、自分の子だけを近視眼的に見ることがなくなり「子育てに余裕が持てるようになった」

高知こどもの文化研究所

子どもたちに豊かな文化を

鳥居 淑子



子ども達に豊かな文化を創造し、伝えようと日々地道に活躍されている方々が高知県下に沢山いらつしゃいます。これらバラバラであった高知の子どもの文化運動の担い手たちの手を結ぶ場として、昨年五月五日に高知子どもの文化研究所を発足させました。子どもに提供する良い文化とは、何よりもまず、大人が感動できる文化でなくてはなりません。それぞれの分野の最高水準で子どもの文化とは何かを提示し、検討し合い、そして子どもにも返していく研究を進めています。毎年五月に開催する「子ども文化公演会」は紙芝居・童話の朗読・子ども歌の第一節、理論の基調講演を第二部に、作家評伝と作品鑑賞を第三部とする三部構成の欲張り公演会ですが、今年小学生の子どもも結構親と一緒に楽しんでくれました。しばらくはこのスタイルを毎年続けていく計画です。定例の研究会は隔月の第三土曜日に所員会議を行っています。次回の所員会議



追手筋から北へ二つ目の路地角、城東公園にこの3月にオープンした公衆トイレ。老朽化のひどい市内中央部の児童公園の便所を明るく爽やかなものにしようと、デザインを一般公募。応募作品をもとに市民の声を参考に、市みどり課でまとめたもの。屋根にトップライトを採用し自然光を採り入れている。

輝いて 想いは深く 平和を歩む 愛のうたです あなたの鼓動を きららにつなげて 彼方の道への 絆となりますことを 一号のとびら詩となった 坂本幸子さんのこの詩が「雲母」の心といえましよう。発行「雲母の会」 代表者 岩崎キクエ 連絡先 高知市万々一八〇 土田京子方 電話 〇八八八―三三―八四三二

な私たちを支えているのは情熱です。確かに私たちのやっているものはまだまだ「芸術」と呼べるものではありません。しかし、何とかしていい音楽を作りたいという気持ちは負けません。技術的に劣る分は若いパワーで何とかカバーして、これからもますます頑張りたいと思います。連絡先 高知市曙町二丁目五一―一 高知大学内 電話 〇八八八―四三―二三四七 石川 真一

という声もあります。また一世代前にはなかったアトピー等現代病の情報交換、紙オムツや環境問題を話し合ったり教えあったり、堅苦しい雰囲気ではなく、まさに井戸端会議なのです。入会に際しての条件は特に定めてなく、母親でも父親でもオジイちゃん、オバアちゃんだれでもOK。入会金七百元、年会費千八百円で、いつでも入会できます。連絡先 高知市西久万一〇四―一四 PMクラブ事務局 島中智子 電話 〇八八八―七二―四〇八六

は、室戸の語り部・門田南子さんの「鯨のゴンチャンを語る」を来る七月二十一日（土）二時半―四時半に予定しています。「子育て」に進学のための受入知識・技術の注入だけでなく、子どもの人間性を育む文化の向上に高知の皆さんの関心が高まることを願っています。連絡先 高知市小津町十一四―二三二 高知子どもの文化研究所 電話 〇八八八―七二―六八〇六

風伯

ここは土佐だ

何年前かに、県外の元大学教授とかの肩書で新聞に投書が載った。高知市内路面電車の全面ポスター広告の「醜態」さに驚くと共に、自分の見たドイツの電車の上品さ、清潔さを讃えた上で、何たる文化の違いであるかという趣旨のものである。この種の文化人は通常、説教はされても、自前で運賃を払って乗ってはいただけでない。全面広告の収益で、少しでも運賃値上げが防げるならとの利用者達とは別の場所に居る人だ。確かにヨーロッパ、特に北・東欧の都市の色彩はすっきりとしているし、ある意味ではスタイックですらある。しかし、反対に中・南米の空港などで極彩

色のびつくりするような飛行機が乱舞している風景なども私は好きだ。お、ざつぱに言って、風土的には低緯度になるほど色彩が溢れる傾向にあり、荒々しいまでの色彩、デザインの氾濫が南国のイメージとしてある。その点からすれば、高知の電車はデザイン上の未熟さは論外として、むしろまだまだ思いつき足りない。市制百周年をデザインした岡本太郎画伯が以前に洋酒会社のCMに出た時のコピー「グラスの底に顔があつたっていい、じゃないか」に倣おう。「ミュンヘンが何だ。ウイーンがどうした。こ、は土佐だ。」そしてその後、こう続ける。「電車の横腹に××××があつたっていい、じゃないか。」××の部分には皆のお好きな言葉をどうぞ。(南北)

高知の森林

高知県緑の環境会議
森林研究会編

B5変型・二二八頁
定価 二、五〇〇円

山村の過疎化と林業危機や、原生林の伐採や開発など、全国的・地球的な規模で森林問題が注目されている今、高知の代表的な山と森林をつぶさに探訪し、まだ残されている貴重な自然や植生のほか、森林と人々とのかわりの歴史や、現地への道のり等も紹介した。カラー・モノクロ写真計百五十点を収録、目で見ても楽しめる、山と森林への絶好の案内書。



画帳の歲月

高知画壇の第一線で活躍してきた重鎮のエッセイ集。美術学校入学から高知大の教授時代、渡欧の体験等、多年にわたる業績を画家の視点で振り返る。また、初期から関わってきた県展の知られざる内情や、ヨーロッパで見た名画を中心に語られる絵画論など、絵画への興味を湧かせる美術エッセイ。新作16点を挿画としてカラーで掲載。



筒井広道著

A5変型・二五六頁
定価 二、〇〇〇円

近刊

西ドイツ・ウルム市からの日本縦断ミニコンサート

ウルマー・カンマー・アンサンブル

日時 ■ 7月21日(土) 開場 6:00 開演 6:30

会場 ■ 自由民権記念館 入場料 ■ 二千元

主催 高知市文化振興事業団

ウルマー・カンマー・アンサンブル実行委員会

西ドイツ・ウルム市などヨーロッパを中心に活躍している演奏家を招き、市民との交流をかねた小さなコンサートをを行います。

ベートベン、ショパン、モーツァルトなど親しみやすい曲を中心に演奏します。ぜひご来場ください。

メンバー

杉本 暁史 ファゴット

星井 暁子 ピアノ

前多 孝一 テノール

礎村 寿彦 ピオラ

礎村みどり バイオリン

ハンス・ヨアヒム・チェーバー チェロ

須賀 陽子 バイオリン

(賛助出演)

チケットは市内主要プレイガイドほか、文化振興事業団でも扱っています。

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町五丁目二番三号

TEL (〇八八八) ③四三六五

郵便振替 徳島8-14869